

152センチ
62キロの恋人 1

Mina & Hayato

高倉碧依

Aoi Takakura

termity



エタニティ文庫

目次

152センチ62キロの恋人 1

立花逸人、○○を自覚する。 297

書き下ろし番外編

良い人は大変です。 343

152センチ62キロの恋人1

人間というのは、二通りの人種に分かれていると私は思う。どう分かれているかというのと、異性にモテるかモテないかだ。

そういう私、森下美奈は、生まれてからの二十三年間、モテないほうに属している。私はどこにでもいる平々凡々な顔に、身長一五二センチ体重六十二キロというチビデブだ。

お腹は出てないけれど、ウエストのお肉がちよっと（かなり？）摘めてしまうし、どんなにこれ以上育つなと願っても成長をやめなかった胸は、今ではFカップになってしまった。

そしてムチムチとしたお尻と太腿……。どれだけ必死にやっても効果のなかったダイエットの数々に、これまで何度も泣いてきた。

茶色い猫っ毛はふわふわとしていて、一年を通していうことをきいてくれたことがない。何度かストリートパーマとかも試してみたけど、頭皮がかぶれて酷いことになった

から諦めた。今では肩先より少し伸ばしたあたりで切り揃えて、縛って纏めることで何とか形を整えている。

……つまり、何も自慢できるものがない見た目をしているのだ。

無駄についているお肉のせいで、小さい頃は周りから虐められることもあった。学校で虐められるのが辛くて、毎日家で泣いていた私に、ある日、母は言った。

「馬鹿にされるのが嫌なら戦え。泣くだけなら誰でもできる。どうしてもしたら現状を打破できるか考え、そして行動しろ。だが忘れるな。馬鹿にされたのが辛かったのなら、美奈は決して人を馬鹿にするな。悪口を言われて悲しかったのなら、美奈は決して人の悪口を言うな。いいか、美奈の中身をきちんと見てくれる人は絶対にいる。その人に出会えた時に、失望されない自分にいるんだ」

そんな私たちを見て、年の離れた兄たちは、小学生になんてことを言うのだ母よ、と頭を抱えていた。

言われたことがよくわからず泣き続ける私を、母はきつく抱きしめながら、「それでも駄目だった時は、必ず母が助けてやるから」と言った。

（戦えってどうやって？）

それから毎日毎日、母が言ったことを考えたけど、どうすればいいのか全然わからなかった。

そんな時、兄たちと見ていたテレビ番組で、私は衝撃を受けた。その時やっていたのはよくあるバラエティー番組で、そこには私よりも太っているタレントが出演していた。その彼女が言ったのだ。

「暗いデブは嫌われるけど、明るいデブは好かれる」

それが全てではないだろうけど、その時の私はこれだと思った。

それからは常に笑顔を心がけた。楽しい時はもちろん、虐められても全然気にしてないと笑って過ごした。そうして、自分なりの戦いを始めた。

何を言われても何をされても笑っている私を、最初はさらに馬鹿にしていた虐めっ子たちは、次第に私を虐めることをやめた。多分私の反応がつまらなくなっただらう。

こうして始まった私なりの戦いは、社会に出ても続いている。

第一話 変態はチャンス逃がさない

(……雨?)

ザアーツという音を目覚ましに、ゆっくりと目を開ける。部屋の中はまだ薄暗かった。今何時なのか知りたくて、寝起きでぼんやりとしたまま、スマホを探すけど見つからない。ただ、カーテンの隙間から見えた外は明るくて、もう日が昇っているのがわかった。朝かあ……と思うながらカーテンを開けるために上半身を起こす。その瞬間、下腹部に鈍痛がはしった。同時に、大事な部分からコポッと液体が流れ出る。

そんな体の違和感に、あれ? 生理がきたかな? ショーツとベッドを汚しちゃうっと思ひ、慌ててベッドから降りようと床に足を着ける。が、立とうとしても膝に力が入らず、そのまま床に崩れ落ちてしまった。

(えっ? 何? っっていうか……えっ、なんで私、裸なの!?)

今の行動のせいで、下半身からはさらにコポッと液体が流れ出ていた。そんな状況と、下着もつけていない自分に混乱しながら、なんでこんなことになっているのかと、私は昨夜のことを必死に思い出そうとした。

* * *

昨日は花の金曜日。私が所属する総務部、そして営業一課・企画二課の合同飲み会の日だった。

うちの会社では部を跨いで親睦を深めようと、半年ほど前から月に一度、色々な部署と合同で飲み会が開かれている。

ちなみに、この飲み会の発案者は我が社の社長の奥様らしい。

昨今の結婚率の低下を嘆いた奥様は、まずは出会いが大事だと思い、社員たちに出会いのきっかけを与えてはどうかと社長とその周りの方たちに提案した。上司からそれを聞いた独身社員たちが乗り気になり合同飲み会を企画したものが、いつの間にか毎月の行事になってしまっているようだ。

私が勤めているのは貿易、建築、電気機器など……様々な業種で成功を収めているMTグループの本社だ。当然、将来有望な男性がたくさんいる。そのため独身の女性陣は、この飲み会にいつも気合十分で挑むのだ。

昨日の飲み会には営業部長の立花逸人さんも来るということで、女性陣の気合いの入

り方も桁違いだった。

立花部長は我が社一の人気者。エリートコース必須の海外支社への転勤を二度経験し、半年前にイタリアから帰ってきたばかり。黒い髪に濃茶の瞳、ほりが深く、精悍さと優しい性格が表れている顔は、芸能人にも負けないイケメンぶりだ。細身でありながらも、スーツがとつても似合う、がっしりとした体の持ち主。仕事面では厳しくも優しい人格者で、理想の上司だと男女問わず慕われている。現在三十六歳、独身。狙われないほうが不思議という男性だ。

……実は私が、身の程知らずにも好きになってしまった人でもある。

四ヶ月ほど前のある日……月末の処理と月初の処理が重なった時があり、総務部の経理課全員が残業をしていた。覚悟はしていたけどなかなか終わらず、とうとう二十時半を越えたあたりでみんながお腹がすいたと騒ぎ出した。そこで、ちょうど区切りのよかつた私が、コンビニに買い出しに行くことにしたのだ。

みんなからあれが欲しい、自分にはこれを買ってきてくれと頼まれるものをメモしていると、一緒に残業していた先輩の由理さんが、「私も一緒に行くわ」と言ってくれた。

頼まれた量も量なので、とつても嬉しかったんだけど……そんな由理さんを周りの男性陣が止めた。

「こんなに暗くなってから女性が外を出歩くのは危ない」

「今日は特に寒いし、風邪をひいちゃいますよ」

「などなど……。由理さんは私と違うモテる人種。美人でスタイルが良く、おまけに性格もとってもいい人。私もよくお世話になっている大好きな先輩だ。「なら美奈ちゃんじゃなくて、あなたたちが行ってくれるのよね？」と、迫力のある笑顔で男性陣に言ってくれた。由理さんは課内の人たちの私への対応に、よく怒っているから……」

この時も、男性陣は笑いながら反論した。

「いやいや、森下は女じゃないから平気だつて」

「そうですね、本木もとぎさんは心配しすぎですつて。こいつを襲うったら返り討うちにされますよ」
なあと顔を見合わせて笑っている彼らに悪気はない。……たぶん、きつと。

「あなたたちっ」

「ほんとですよねっ、由理さんは心配しすぎです。じゃあ私、行ってきま〜す」

こういう扱いに慣れているからといって辛くないわけじゃない。怒鳴り声をあげようとしてくれた由理さんの袖そでを引つ張つて止め、へらつと笑うと、私は財布を持ってその場から逃げ出した。

うちの会社の近くには、コンビニが三つある。あえてその中で一番遠いところを選ん

で、頼まれた食料や飲み物をカゴいっぱい買った。大きな袋を両手に持つて会社に戻りながら、心の中で必死に平常心平常心と唱える。

(気にするな、いつものことだ)

その時、背後から声をかけられた。

「もしかして森下さん？」

その美声に一瞬、ある人を思い浮かべた。まさかねと思ひながら振り返ると、そこにはまさかと思った人物——黒のコートを着た立花部長が立っていた。立花部長とは、一度由理さんと一緒に社食にいた時に、自己紹介のような会話をしただけだったから、名前を覚えてもらえているとは思わなかった。だから余計に驚いた。数メートル先に立っている立花部長は、ポカンとしている私の顔を見ると、眉間にしわを寄せた。

「やっぱり森下さんか。そんなに荷物を持ってどうしたの？ それにコートは？ まさかその格好で会社からここまで来たの？」

「あ……。今日うちの課、全員残業で。まだかかりそうなんで私がい出しに来たんです」

「買い出して一人で？ ああ、ちょっとそれを置いて」

そう言いながら足早に目の前までやってくると、私の両手の荷物を地面に置かせた。そして、自分が着ていたコートを私にかけてくれる。

「こんなに手が冷えて……寒かったろ？ これを着なさい」
 「だ、大丈夫ですつ。私、お肉が厚いので寒さを感じないんですつ」
 「何を言ってるの、そんなわけないだろう。女の子なんだから体を冷やしてはいけないよ。いいから着なさい」

そうして私に着せたコートの前ボタンを留めると、地面に置いてあった荷物を持って歩き始めてしまう。慌てて追いかけて荷物を返してもらおうとするけど、絶対に渡してはくれなかった。

「あのつ、立花部長に持ってもらうわけにはいけませんつ」

「何を言ってるの。こんなに重いものを君に持たせるわけじゃないでしょう。まったく……総務の男どもは何をしているんだ」

「いえ、私が自分で行くと言ってる……」

「それでもこんな時間に女の子を一人で買い出しに行かせるなんて……何かあったらどうする気なんだ」

『女の子なんだから』『女の子に』

そんなことを家族以外の男性に言われたのは、生まれて初めてだった。私のことを女の子として扱ってくれるなんて……。立花部長がみんなに人気がある理由が、よくわかった。

気を抜いたら裾を地面に擦ってしまいそうなほど大きい男物のコート。その温かさに、涙が出そうになるのを堪えながら歩く。

会社のロビーに入ったところで、後ろから私を呼ぶ声があった。振り返ると、顔を真っ赤にした由理さんが走り寄ってくる。

「ごめんね美奈ちゃんっ、急いで追いかけたんだけど、どこのコンビニに行ったのかわからなくて……。ローモンかなと思って行ってみたんだけど、美奈ちゃんいなくて……。ああっ顔が真っ赤よ？ 寒かったでしょう？ ダメよっ、ちゃんと上着を着ていかないと！」

そう言うと、手にしていた私の上着を着せてくれる。すでに立花部長のコートを着ているのに、その上にさらに着せられ、いつも以上に丸々としてしまったけれど、由理さんの優しさが嬉しくて嬉しくて堪らなかった。

「ありがとうございます、由理さん。ローモンよりエイトの気分だったんでそっちに行っていました。でもコンビニから帰る途中で立花部長と偶然会いました、ここまで荷物を持ってもらえたので……」

「立花？ あっ、ホントだ。あんたいつかからそこにいたの？」

「最初からいた。いいからほら、行くぞ」

結局、立花部長は、総務部まで私が買い込んだ荷物を運んでくれた。突然の立花部長

の出現に驚く男性陣に、「夜の買い出しに女を行かせるような男はモテないぞ」と、チクリと皮肉を言う。

そうして帰っていく後ろ姿を見ながら、私は身の程知らずにも胸のときめきを抑えられなかった。

それからも同じようなことが何度かあった。

段ボールを運んでいたら、「こういう力仕事は男性に助けてもらいなさい」と手伝ってくれた。残業で遅くなった日にたまたまロビーで会った時には、「もう暗いから送っていくよ」と駅まで一緒に歩いてくれた。その度に、部長に対しての憧れが募っていった。そして今、それは間違いなく恋心へと変わっていた。

飲み会は、コップ一杯のビールで酔ってしまう私には辛い場所だ。……それ以外にも辛い理由はあるけどね。

私の予想どおり、立花部長は開始早々、女性陣に囲まれていた。そこから抜けて男性陣にまざっても、すぐに違う女性たちがその周りを囲む。そんな姿を、私は由理さんと隅っこで飲みながら見ていた。

これが私がいままで飲み会に来たくない理由の一つ。立花部長を好きな人はいっぱいいるって知っていても、実際に見るのは結構辛いから……

立花部長と同期である由理さんは、彼女たちを見て「相手にされてないのに、よくやるよね」と毒を吐いていた。

立花部長と由理さんは仲が良く、二人にはよく、付き合っているんじゃないかとか結婚するんじゃないかとかの噂が出る。そんなわけで立花部長ファンの女性社員に、嫌がらせをされることが多い由理さんは、立花部長ファンの女性に厳しい。

私も最初の頃、二人が付き合っていると思っていたから、「本当のところ付き合っているんですよね？」と聞いたことがある。けれど由理さん曰く「あいつだけは嫌、人類最後の二人になってもありえない」らしい。美男美女でお似合いなのに……と言うと、由理さんはニヤツと笑いながら何かを小声で呟いた。

「美奈ちゃんにそう思われていると知ったら、あいつどうなるかしら……」

よく聞こえなくて聞き返したけど、由理さんは笑うだけで教えてくれなかった。

しばらく二人で飲んでいたけど、由理さん目当てに他課の男性たちがやってきたので、トイレと称してこっそり抜け出し、廊下の隅にあるソファで休むことにした。同じ課の酔っ払いたちに絡まれて、いつもよりも急ピッチで飲んだから、今日はもう私の許容量を随分超えている。

ふうつと息を吐き出しながら目を瞑って、綺麗な女性に囲まれている立花部長の姿を思い出す。

(やっぱり人気があるんだなあ。私も由理さんみたいだったら……彼女にしてくれたかな……)

私は今まで男性に、女性として見てもらえたことがない。どんなに仲が良くなっても友達止まり。憧れていた人や気になっていた人に、恋愛相談や橋渡しを頼まれたこともたくさんある。

それでも一度だけ勇気を出して、告白をしたことがある。中学生の頃、初めて本気で好きになったその人には、「は？ 冗談だよな？ 俺、お前を女と思ったことがない」という返事をもらった。

そのあとそのことをクラス中に知られて、私は卒業までからかわれ、仲の良かったその彼には目も合わせてもらえなくなった。

この時、やっぱり私は異性からはよくて友達止まりで、好きだとかそういう感情を持つことすら、相手にとっては迷惑なんだと思った。

それに……自分で決めたことだけど、どんなに辛くても周りと一緒に笑ってしまおう自分も嫌になった。みんなの前では一緒になって自分を笑い、家で一人泣きながら考えた。(恋愛っていうのは、私みたいな見た目の女には遠い世界のことなんだ)

バカみたいだけど、その時の私は本気でそう思った。世の中、見た目で恋愛していない人だっていっぱいいるのに、たった一度の失敗で、私は恋愛することを諦めた。

ただ私には、私が馬鹿にされたりした時に、私の代わりに怒りをあらわにして泣いてくれる友達が二人もいたから、それで十分かな？ と思った。恋愛なんてしなくても、大好きな友達がいれば、まあまあいい人生なんじゃないかな、と。

お見合いは、隠れ人見知りの私にはハードルが高いから、結婚も諦めた。だから短大を出てこの会社に入れた時はホッとした。これで人生安泰だ、と。

それでも恋をしないというのは無理で……中学生以来、初めて好きな人ができた。それが立花部長だ。

社内でも……いや社外でもより取り見取りだろう立花部長と、どうにかなるなんて想像したこともない。ただ……家族以外で初めて、私を女の子として扱ってくれた立花部長を、秘かに好きでいるくらいは許してほしい。絶対に迷惑をかけるようなことはしないから。

そんなことを考えながらうつらうつらとしていた時、耳元で予想外の声があった。

「もしかして、森下さん好きな奴がいるのか!？」

「え?」

驚いて声のほうを向くと、何故か立花部長がすぐ横に座っていた。

(なんで立花部長がここにいるんだろ……?) あんなにたくさん女性の陣に囲まれてい

たのに……。そっか……。私はいぶ酔っているんだな……。頭が半分寝ているんだ。起きながら夢を見るなんて、なんて器用なんだろ、私)
 そんなことを考えながら、ポーツと立花部長の顔を見ると、部長がなんだか必死な顔をして私に詰め寄ってきた。

「教えてくれ、森下さんが好きな奴は誰なんだ!？」

「好きな人……ですか？」

「いるんだろ？」

「います……。けど部長には内緒です」

せつかくいい夢を見てるのに、本当のことを言っただけで夢の中でまでふられたくない。そう思っただけで内緒だと言ったのに、部長はしつこく食い下がってくる。

(ちよ、ちよと立花部長っ、いくら夢でも顔が近いですっ)

「なんで内緒なんだ？俺が知っている奴なのか？誰なんだ？井上課長か？企画の川崎か？それとも営業部の人間か？」

「秘密ですって」

「頼むから教えてくれ！どんな奴なんだ？」

「名前は秘密ですけど……とつても優しい人です」

教えないって言っているのに、何度も何度も聞いてくるから、結局ちよとずつ答え

ていってしまふ。……近すぎる顔の距離にテンパっていたせいもあるけど。

「うちの会社の人間か？背は？顔はどうなんだ？」

「うちの会社の人です。背も高くてかっこいいです。とつてもモテる人で、由理さんとお似合いで……。だから私は見るだけで満足なんです」

「由理……本木と……。そうか……」

「はい」

「森下さんは……。なんでそいつのことを好きになったんだ？」

「優しくしてくれたんです……。初めて私のことを女の子って言ってくれた男の人なんです……」

「そんなの当たり前じゃないかっ、森下さんはとつても可愛い女の子だよっ！」

「ありがとうございます」

立花部長は夢の中でまで優しい……。おかしいな……。もう夢を見てるのに、さらに眠くなってきてしまった。会社の飲み会で寝るなんてダメなのに……。起きなきゃいけないのに……。ダメだ……。眠い……

「告白する気はないの？」

「ふられるのはわかっていますし……。それに私、恋愛は諦めているんで……。ホントは一度くらい……。デートとか……。いろんなこともしてみたいですけど……」

「じゃあ俺としようっ、デート。……それ以上でもいいけど」
 「ふふっ。部長、私なんかでその気になるんですか?」
 「もちろんっ! むしろお願いしたら抱かせてくれるなら、今ここで土下座だってするさっ」

「ほんとに優しいですね。……ふふっ、そんなのこっちからお願ひしたいですよ……」

「なら今夜……これから俺の部屋に来てくれる?」

「はい……嬉しい……です。いい思い出になりますね……」

そう答えたあと、私は夢も見ない眠りに旅立った。

「……ん」

「起きた? そろそろお預けが辛いよ」

その言葉と一緒に、閉じた瞼まぶたに何か柔らかいものが触れた。それが何かはわからなかったけど、近くに誰かがいるのはわかったから、渴いた喉のどを潤うるすものが欲しいと頼んだ。すると、すぐに唇に何かに触れる。うっすらと口を開けると、ぬるめの水が流れ込んできた。

少しずつ注そそがれるそれじゃあ足りなくて、もっと欲しいと口を大きく開けると、小さく笑う声が聞こえた。

そのあと、何度も水を飲ませてもらった。

ようやく満足すると、今度は柔らかくて力強い何かが、にゆるっと口の中に入ってきた。それは私の舌を絡めとり、口内を縦横無尽じゅうおうむじんに動き回る。息苦しさいきぐるしさに頭を振ると、私の口を占拠していたものはあっさりあつさりと離れていった。

足りなくなつた酸素を、呼吸も荒く取り込む。すると今度は、耳たぶを温かく湿つたものが包んだ。くすぐつたさに体が震えた直後、耳元で大好きな人の声がする。

「キスも初めてだった? 嬉しいよ。これからたくさん練習しよう……」

「……え? た、ちばなぶちよ……?」

「逸人って呼んで。……可愛い耳たぶだね、ピアスの穴、あけてないんだ」

「母が……嫌がるので……私も痛いのは嫌いですし……」

「痛い嫌いなんだ……? じゃあ嫌われないように……優しく……時間をかけて溶かしてあげよう……」

耳元でピチャピチャと音がするのを聞きながら、ああ、私はまだ夢を見ているんだな、と理解した。随分自分の願望が入つたりアルな夢だなと思いつつも、どうせならこのまま最後まで覚めないでほしいと思つた。

立花部長は何度も私にキスをした。

口の端から含みきれなかった唾液が流れていくと、それを部長の舌が追っていく。大きく開いた口で、肉食獣が獲物を捕らえるように私の喉元に口付け、ジュルツと音を立てて舌で舐めて、軽く歯を当て刺激する。

一瞬ぞわっと足から頭まで震えが走る。次の瞬間、足の付け根から何かがとろっと流れた。

丹念に首を舐め回していた舌は、次に鎖骨に向かうと、何度もそこを食み、吸い上げる。その間に立花部長の両手は、私のスーツとその下のシャツのボタンを外していった。現れたブラを上へずらし胸を外に出すと、両手で私の贅肉の塊である胸を優しく揉みながら、その頂を口に含む。お風呂で洗う時くらいしか触れたことのないその部分を、部長の舌で転がされ、歯で軽く噛まれると……下腹の奥が熱くなった。

「……んっ……っふ」

「気持ちいい？」

「わからない……お腹が……熱いです……」

「可愛いっ」

その言葉と共にまた口を塞がれる。部長はそのまま両手で胸を揉んでいたけど、やがて片手をお尻のほうへと下ろしていった。

何度もお尻を撫でたあと少し体を離し、ゆっくりと私の服を脱がしていく。さすがに

ショーツを脱がされるのは抵抗があったけど、どんどん動きを激しくしていく部長の舌に翻弄されているうちに、足から抜き取られていた。

唇を解放されたあとも、激しかったキスの余韻にボーっとしてしまう。ふと気付くと、私の両足の間に部長が収まっていた。

部長に両太腿を持たれて腰を上げられ、お尻の下にクッションを入れられる。大事な部分を部長に突き出すような格好が恥ずかしくて、拒否の言葉と一緒に暴れてみたけど、部長は決して私の太腿を放してくれなかった。更には信じられないことに、私の秘所にゆっくりと顔を寄せていってしまう。

「いやっ、そんなとこ見ないでっ」

「何故？ とつても綺麗で可愛いのに……」

そしてペロツと舐めする。まだ乾いているそこを、部長の肉厚な舌が何度も上下に舐め上げる。ひだが合わり固く閉じたそこをこじ開けるようにして舌を押し込まれ、震える秘芯に鼻で軽い刺激が与えられた。

「ダメツ！ やだあつ」

どうにかして部長の舌をそこから離そうともがいたけど、宙に浮いている足がバタバタと動いただけだった。体全体で抵抗すると、何故か部長の顔が私の秘所に余計に押し付けられてしまう。涙目で部長の頭をグイグイ押ししていると、小さい笑い声が聞こえ、

やっと立花部長が頭を上げてくれた。

「そんなに嫌？」

「当たり前ですつ、そんなとこつ、そんなつ、きたないのにつ、ぶ、部長が汚れちゃいますつ」

自慢じゃないが、私の性知識は保健体育止まりだ。あんなところを舐めしゃぶられ、舌を突き入れられるなんて信じられなかった。そして、そうされると下腹の奥から何か溢れ出してしまい、ぐちゅつと音がするのが堪らなく恥ずかしい。

部屋中に響く音も、あんなところを大好きな人に晒しているのも、お腹の奥から込み上げてくるよくわからないものも、全部が恥ずかしくて……

「汚れる？ 俺が？」

目を丸くしたあと、立花部長がとても楽しそうな笑い声を上げた。私はなんで笑われるのかわからないながらも、少しづつお尻をクッションからおろして距離をとろうとする。

「美奈のここは綺麗だって言っているだろう？ 俺のせいで美奈が汚れることはあっても、美奈のせいで俺が汚れることはないよ。むしろ、俺ので美奈が真っ白に汚れるところを見たいくらいだよ……」

後半は部長が顔を伏せてしまつてあまり聞こえなかつたけど、何だか聞き返すのが怖

くて、何も言わずにじりじりとお尻を動かし続けた。……なのに、勢いよく顔を上げた部長はにっこり笑うと私の太腿を掴み、グイッと一気に引き戻して私の努力をゼロにしてしまつた。

「ふえっ!？」

「美奈、俺から逃げるのは駄目だ。……優しくしたいんだ、だから煽らないでくれ」

「煽ってないですつ、ひゃっ」

再びあの恥ずかしい姿勢に戻され、部長にゆっくりと太腿を舐め上げられる。左の膝の近くから、段々と私の秘所に近づいた舌は、もう少しで触れるというところで右の太腿に移動した。

持ち上げた私の足に舌を這わせながら、部長は私の目をまっすぐに見つめている。

恥ずかしくて怖くて、目を背けたのに、私は何故か動けなかった。両手を口の前で合わせ、まるで祈りをささげるような格好のまま、部長と見つめ合つてしまつた。

何もされていない秘所が、部長の息遣いに反応するようにピクピク動くのが自分でもわかった。何度目かの接近のあと、部長の舌が秘芯を舐めた。軽く歯を当てながら舌で優しく擦られる。

「ひうつ、い、やつ、やだつ」

体中のぞわぞわが増してしまつた。それが嫌で何とか腰を動かしていると、部長は私の

足をさらに広げて内腿うちももを押さえつけ、まるで楔くわしを打ち付けるかのように私の膣ちゅうに舌を押入れた。

舌で膣内なかをグリグリ刺激され、何度も舌を出し入れされた。もう嫌だ、やめてと何度もお願ないしたのに、部長は私の秘所ひじよからなかなか顔を離してくれない。

ようやく部長が顔を上げてくれた時には、私の顔は涙と涎よだれでそれは酷ひどいものになっていたと思う。それなのに、部長はそんな私を可愛かわいいと言って、嬉うれしそうに目じりにキスを落とす。

「痛かつたら言うんだよ？」

そう言うと、部長は私の秘所ひじよに指を一本突き入れてきた。違和感はあるけど、別に痛いとは思わなかった。緊張こわばに強張こわばる私の肩を宥なだめるように撫なでながら、部長は指を入れられた私のそこをジツと見つめる。

「大丈夫？」

「はい……」

「ならもう一本増やそうか」

その言葉に小さく頷うなずく私を見つめつつ、部長はそのゴツゴツとした指をもう一本入れてきた。すると入り口でピリツとした痛みを感じた。

「いっ……」

「痛い？」

「大丈夫です」

本当に少しだけの痛みだったから、平気だと頭を振って答えると、部長は二本の指をゆつくりと抜き差ししながら、中でかき回すように動かし始めた。

「んっ、んっ……ふっ」

自然と漏もれてくる声を何とか手で押さえていたのに、その手を外され部長の背中に回されてしまう。部長の顔を見上げると、優しく笑ってちゅっと軽いキスをされた。

「可愛い声を隠さないで……」

「可愛くないで……っすう」

「可愛いよ、可愛すぎて堪たまらない」

本気でそう思っているかのような蕩とろげんばかりの笑顔で見つめられ、ジワッと涙なみだが滲にじんできた。

(ホントになんて夢なんだろう。こんな幸せな夢なら、一生目が覚めなくていいのに……)

そう思いながら、部長の背中に回した腕に力を入れ、力いっぱい抱きついた。

部長は私を抱きしめ返してくれつつも、秘所ひじよに入っている指を容赦ようじやうなく三本に増やす。みちみちと自分の中を広げられる感覚。小さな痛みと圧迫感から逃げようと浅い呼吸を繰り返す。そんな私を注意深く見つめながら、部長は私の耳元みみもとでそっとなぐく。

「大丈夫、ゆっくりやるから力を抜いて……」

「は、い……」

くちゅりと耳元から聞こえる音とその声で、自然と力が抜けていく。

丹念に耳に舌を這わせながら、部長は空いている手で胸の頂を摘んだ。ピクンツと体を揺らすと、宥めるように耳や唇にキスが落とされる。そうして力が抜けると、再び三本の指が私の中で蠢いた。

しばらくすると、耳にキスをされていなのに、ぐちゅぐちゅという音が聞こえ始めた。その音をどこか遠くで聞きながら、私はこれまで経験したことのない感覚を追うのに必死だった。

（お腹の奥が熱い。熱があるのかと思うほど体中が熱い。体が勝手にピクピク跳ねてしまうのは、なんで？ もうよくわからない。この感覚は怖い。嫌、怖い。空中に投げ出されるようなこれは——）

次の瞬間、真っ白に塗りつぶされた世界に放り出された。

ああ、目が覚めるのかと思った。

でも、うるさい心臓を宥めながらゆっくり目を開けると、目の前には嬉しそうに私を見下ろす部長がいた。

「あれ……?」

「可愛いな、いつちゃったのか。気持ちいい?」

まだ終わりじゃなかったのかと思うと嬉しくて、思わず部長に抱きつく。すると、お返しのように優しく抱きしめられた。とても幸せな気持ちでいたのに、急にその体を離される。ビックリして部長の顔を見ると、その顔は辛そうに歪んでいた。

「どうし……たんですか……?」

「ちよつと失敗したな、と思ってね。今日こんなことになると思ってなかったから、ゴムの用意がないんだ」

「……ゴム?」

「コンドーム」

「……えっ!」

「もったいないけど、ここまでかな……次の時はきちんと用意しておくから」

そう言って、軽くキスを落として起き上がろうとする部長の腕を、慌てて掴んだ。こんな夢を今度いつ見られるかわからないのに、そんなの嫌だっ。

「だ、大丈夫ですから最後までしてくださいっ!」

「でもそうしたら……妊娠しちゃうかもしれないよ?」

「あのっ、それはないから大丈夫なんですっ」

夢の中でいくら妊娠したって、目が覚めたら元どおりだ。必死に大丈夫だからと繰り返

返す私をしばらく見つめたあと、部長は微笑みながらまた抱きしめてくれた。

戻ってきた温もりにもっと抱きしめ返した時、耳元で微かに幻聴が聞こえた。
「安全日だったか……ついてないな」

（あの紳士な部長がこんなことを言うわけがないのに。私ってばこんな願望を持っているなんて……目が覚めたあとと会社で部長を見た時、まともな顔をしていられる自信がないな……）

恥ずかしくて部長の顔が見られず、視線を逸らしていると、部長が私のおでこに軽い音のするキスをした。そして「挿入れるよ？」と囁く。何も言えずに小さく頷くと、さっきまで部長の指が入られていた秘所の入り口に、熱を持ったものが触れた。私の入り口の割れ目に沿って何度か上下に動かされたそれが、ちゅぷつという音のあと、ゆつくりと押し込まれてくる。

（みんな初めては痛いつて言っていたけど、夢って痛覚ないはずだし平気だよね……？あれ？でもさつきはちゅつと痛かった……あれ？）

次の瞬間、下腹部を襲ったあまりの痛みに驚いた。

（こんなとこまでリアルにしなくてもいいのに！）

痛みを堪えるために思わずギュッと体に力を入れてしまう。部長は「……っは」と呻いたあと、私の顔を挟むように肘をつき、顔中にキスを降らしてくれた。

「美奈……、ごめん痛いよな？なるべく痛まないようにするから力を抜いて？」

「ご、ごめん、なさい……」

「美奈が謝ることなんて何もないよ。ほら、キスをしよう？口を開いて……」

「ふっ……んう……」

言われたとおりに口を開くと、すぐに部長が喰らいついてきた。絡まる舌を部長の口の中に引つ張られたり、逆に自分の口に押し込まれたりする。それとタイミングをあわせるように部長の熱がちゅぷちゅぷと音を立てながら浅く出入りを繰り返した。

我慢できるけどちゅつと痛い……、そんな抽送を繰り返されるうちにだんだんと痛みが麻痺してきて、体から力が抜けていく。

「美奈……このままゆつくり開かれるのと、一瞬痛いの、どっちがいい？」

「え？」

「一番容量があるところは入ったけど、まだ美奈の奥までは開けてないから、もう少し辛い思いをさせてしまうんだ。だから美奈が選んで。このままゆつくりと時間をかけて開かれるか、一気に奪われるか……」

さすがに私でもその意味がわかった。今の時点でまだすべてが収まったわけじゃないって言われて、正直ショックを受けるほどにはいっぱいいいけど、この状況で辛いのは私だけじゃないはず。だって私を見下ろす部長のほうが、私よりずっと辛そう

なんだもの。

汗で濡れている部長の背中。そこに回した手に力をこめると、「一気にお願いしま
す……」と頼んだ。

部長は、私のこめかみに唇を付けながら、「わかった。でも、できるだけ力を抜いて
いるんだよ」と言う。私は深く息を吐いて頷いた。

何度も深呼吸を繰り返す私の唇を、部長の唇が塞ぐ。喉の奥まで刺激するキスをされ
ながら部長の指で秘芯をクリッと摘まれると、腰から目の奥まで電気が流れたような痺
れが走った。

「ふうっ、あ、いつ……あああああっ」

体の力が抜けた瞬間を狙ったかのように、私の腰を掴んだ部長が一気にその距離を詰
めた。

お尻に部長の腰が当たったと思うのと同時に襲ってきた激痛。

我慢できずに体を強張らせると、部長は私をぎゅっと抱きしめてくれた。

「痛いよな？ ごめんね。やっぱり初めての子に俺のはきつかったかな……」

「大丈夫ですから、あの、部長の好きなようにしてください」

いくら経験がなくなつたって、入ったら終わりじゃないことくらいは知っている。それに
よつて襲ってくるだろう更なる痛みを覚悟しながら見上げると、立花部長がうっすら額

に汗を浮かべながら微笑んでいた。

「だから逸人だつて。いいんだよ、こうして美奈の中にいるだけで……俺は十分気持ち
いいから」

そう言うと、部長は挿入したものを抜き差しすることなく、グイッと押し付けるよう
にして腰を回した。すると部長の腰で秘芯が潰され、部長を呑み込んでいる場所がさら
に潤いを増す。入れられた熱い棒はそのままに、少しだけ体を離れた部長は、私の胸の
頂に吸いついた。

「んやっ、……はあ……」

歯で軽く噛まれたかと思うと、口から出されて空気に晒される。熱い部長の体温に慣
らされていた頂が、冷たい空気にピンと尖つていった。より摘みやすくなったその場所
を、部長の舌が這う。

存在感抜群のお腹の中のものが見えなくなるのを感じながら、本当にこれでいいのかと
不安になってきてしまう。

「あ……あつ、……ぶつちよ……お」

「ん……？」

「私……大丈夫なので、あの、好きなようにしてください……」

「……っ、はあ、俺は本当に気持ちいいんだよ。段々柔らかくなってきた美奈の膣が、

俺のものを放さないって包み込んでいるのが堪らない」

部長が本当に嬉しそうな顔をしているのが気恥ずかしくて、彼の顔が見られなくなつた。

胸を苛める役目を指に譲り、部長の舌が次の標的に決めたのは私の唇だった。深く合わさつた証のように、私の口の端から二人分の唾液が流れていく。それを感じながら、私も激しいキスに夢中になっていった。

時折きつく秘芯を摘まれると、その刺激で腰が揺れる。すると私の中の部長も震えた。部長を呑み込んだ場所からちゅぷちゅぷと水音が聞こえる。それを意識の遠くで感じながら、幸せな夢に酔いしれた――

繰り返されるたくさんのキスと、胸や秘芯への愛撫。そしてたまにゆっくりと腰を回される。

それはとても長い時間だったようにも思うし、とても短い時間だったようにも思う。最初に感じた痛みがどんどん遠のいて、私はただただ気持ちよくなっていた。

「んっ、んうっ、う……はあ……」

「美奈……好きだよ……美奈……」

何度も耳を食みながら囁く部長の呼吸が、次第に荒くなっていく。ふいに力いっぱい抱きしめられたかと思うと、私の中の部長が震えた……私の中でビクビクと震えていた部長の熱がやがて大人しくなると、荒い呼吸のまま体を離される。そして両足首を持ち上げられたかと思うと、そのまま大きく足を広げられて、部長を受け入れたばかりの秘所を間近で見られた。

部長に足を上げられた拍子に自分の中からコポリと何かが流れていくのがわかった。

それを部長に見られるのが恥ずかしくて堪らない。嫌がつて足を閉じようとものがくけど、がっしり掴んだ手は離れてくれない。

「やだあつ、見ないでください……」

「何故？ ああ……美奈の中から俺のと美奈の初めてが混ざり合つて出てくる……堪らない……」

嬉しそうな声でそう言うと、立花部長が私の秘芯を舐めしゃぶり始めた。じゅるっ、ぐちゅっつと響く水音。許容量をオーバーした羞恥心に私はとうとう泣き出してしまった。

「もうやだあつ、放してっ！ やあーっ！」

「ああつ、ごめんっ、俺が悪かったから泣かないで」

私の泣き声に慌てて顔を上げた部長が、宥めるように顔中にキスを落としてくる。それを感じながら、本当に限界だった私の意識はブラックアウトしたのだった。

* * *

そんなことを思い出した私は、床に座り込んだまま、もう一度今いる部屋の中を見渡してみる。

さっきは気付かなかったけど、自分の部屋とは明らかに違う内装——どどん怖くなってくる。

（昨日のは夢、そう、夢だったはず。なら、ここはどこ？ 飲み会の時にたまにお世話になる由理さんの部屋とも違う。微かに香るコロン……）

心臓が尋常じゃなく激しく鳴っている。すると、ふいにさっきまで聞こえていたザーっという雨音みたいなものがしなくなった。少し間をあけて、今度はすぐ近くで扉が開く音……

そしてそこから入ってきたのは、ここにいてほしくないと願いつづけた人だった。

「おはよう美奈。そんなところに座り込んでいたら寒いだろう？」

ズボンだけを穿き、上半身を惜しげもなく晒している部長は、優しく微笑みながら近づいてくると、呆然とする私を軽々と抱き上げてベッドへと戻した。

「あ……の、わ、私……」

「ん？ どうした？ ああ、体が気持ち悪いかな？ 昨夜軽く拭いたんだけど。今用意してきたから、一緒にお風呂に入ろうか」

そう言うと、また私を抱き上げてしまう。夢にまで見たお姫様抱っこだが、感情がつかない。

必死に下ろしてくれと頼んだけど、部長は笑うだけで聞いてくれなかった。

ようやく下ろされたと思ったら、もう浴室。洗ってあげるといふ部長から必死に逃げながら、とにかく謝った。

「違うんですっ、すみませんっ。言い訳にもならないですけど、き、昨日は酔ってて夢だと思っつてっ！ あのっ、あのっ私っ！ んぐっ」

腕を掴まれ勢いよく部長に引き寄せられると、キスで言葉を止められた。そしてそのままきつく抱きしめられる。

「言わないでいい、わかっている。美奈は川崎が好きなんだろう？ だが、簡単に諦められるような思いなら、俺は引かない。したいと言っていたデートも、キスも、セックスも、全部俺と経験すればいい。全部俺が教える」

「かつ川崎主任!? ち、ちがっんんう」

「美奈、俺を見てくれ。君が好きだ」

「んんん〜?」

この時私は、人間は驚きすぎると思考が止まるのだと知った。貪るようなキスの中、少しずつ思考が動き始めた私は、とりあえず部長の誤解を解かなければと思い、彼から体を離そうとした。それを部長は拒否していると取ったようだ。余計にきつく抱きしめられたあと、何とかつまずいて立っていた両足を広げられる。動いた拍子にまた何かを零す秘所に、熱く滾った部長のものがあてられた。

「美奈……もう一度抱きたい。美奈、俺を受け入れてくれ……」

「あ、あう」

「嫌？」

好きな人に抱かれるのが嫌なわけではない。反射的に首を横に振ると、すぐさま部長のものが私に押し入ってきた。昨夜初めてを済ませたばかりのその場所が、微かにひりひり痛みを訴えたけど、嬉しさが勝ってしまった気にならなかった。

昨夜と違って激しい腰の動きに、部長の首にしがみつくことで何とかついていく。浴室の中に肉を叩くパンツパンツという音と、ぐちゅっぐちゅっという卑猥な音が響く。

「美奈っ、好きだっ、美奈っ」

そうしてきつく抱きしめられ、部長のものが震えるのを感じた私は、戸惑いと幸福感の中……二度目のブラックアウトを経験した。

結局部長の誤解が解けたのは、その日の夕方だった。

お昼ごろに目が覚めた私はすぐに誤解を解こうとしたのだが、なかなか私と部長の会話が噛み合わず、しかも部長は体での会話を仕掛けてきて……。なんとか落ち着いた部長と、ゆっくり話せたのが夕方だったのだ。

そして、気持ちを通じ合って盛り上がった部長にまた挑まれ――

へ口へ口になりながら車で家へ送ってもらったのだが、玄関先で送ってもらったお礼を伝えているところを母に見つかってしまった。

焦る私を尻目に部長と母が意気投合。私が知らないうちに、何故か我が家では私に婚約者ができたことになっていたんだけど……

それはまた、別のお話。

変態はチャンスを逃がさない おまけ

初体験を終え、気を失ってグツタリと横たわる美奈をしばらく見つめたあと、逸人はおもむろに己の滾る肉棒を彼女の秘所に挿入した。

彼女の腰をしつかりと掴み、そのまま激しく腰を叩きつける。微かに漏れる美奈の声を聞きながら、意識のない状態でも己を熱く締め付ける膣を堪能した。

日本に帰国してすぐ、会社で一目見た時から可愛いと思っていた。

明るく笑う姿も、たまに見せる悲しそうな姿も、全てが可愛くて仕方がない。どんな仕事も一生懸命やり、無茶を言われても引き受けてしまうお人よしなところも逸人を魅了した。

同期の本木をダシに話しかけることには成功したものの、そこから先へはなかなか進まない。何とか接点を持つと色々画策したが、どうにも上手くいかずに数ヶ月が経ってしまった。

何度食事に誘っても断られ……もしかしたら付き合っている男がいるのかもしれないと思いはじめていたが、どうやら恋人はいないものの、好きな相手がいるらしい。

それを知った直後は正直動揺したが、すぐに考えを改めた。そんなことはたいした問題じゃない、と。逸人のことしか見られないように縛りつければいいのだ。心も……体も……

美奈が酔っていることなどわかっていた。そんな彼女を半ば強引に家に連れてきたことも自覚している。だが初めてやってきたチャンスを手放すほど、逸人はいい人間でも馬鹿でもなかった。当然夢現な美奈を抱いたことに後悔はない。

そうして今、彼女はこの腕の中にいる。

もともとから美奈を相手に避妊をするつもりはなかった。美奈の性格ならたとえ他に好きな男がいたとしても、子供ができたら逸人と結婚するだろう。

ただ、美奈の言質を取るために一度引いた。言質が取れなければ、美奈が自ら欲しいと言うまで、快楽を与え続けるつもりだった。そんな逸人に美奈は大丈夫と繰り返し返した。あの顔は本当に妊娠の可能性を感じていない顔だった。その顔を見て逸人が思ったことは――

(タイミングが悪かったか)

その一言だった。だがすぐに思い直した。たとえ安全日だとしても、もしかしてということもある。そんなものは関係ないほどに注ぎ込めばいい。

カーテンの隙間からうつつすらと朝日が差し込むまで、美奈の膣内に欲望を注ぎ込んだ

あと、ようやく逸人が体を離すと……美奈の体内から、収まりきらない残滓ざんじが流れ出した。長い時間開かれていたせいで赤く腫はれている場所から、おびただしいほどに出てくるそれを満足げに眺めると、美奈の下腹部に愛おしげに口づける。

（孕はらんでいればよし、そうでないなら毎日でも注そいで、できるだけ早く捕まえる）

あれだけ激しく抱いたのに、一度も目を覚まささない美奈の……ここ数ヶ月焦こがれてやまなかった唇を愛めでながらうつそりと囁わう。

「今はゆっくり眠るといい……次に目が覚めたら容赦ようじやはしない。愛しているよ、美奈」

遅くに発病したこの病は、止とまることなく逸人を侵おしていた。

初恋に身を焦こがす男が、愛する女性を真実手に入れるのは、もう少し先のお話……

第二話 変態は恋人を甘やかす

思いもよらないことが起こった飲み会の翌週、月曜日の朝。

私、森下美奈がいつものように会社の更衣室で制服に着替えていると、なんだかやけに周りからの視線を感じた。

最初は気のせいかもしれないって思っていたけど、たまに小さく私の名前も聞こえてくる。我慢できなくて声が出たほうをチラッと見ると、目が合った人たちに勢いよく顔を逸そらされた。

（なんだろう？ 私、何かしたかな……）

この状況は、小さい頃の虐いじめられていた記憶を思い出させる。思わず暗くなりそうな気持ちをはるか切り替えて、足早に総務のフロアに向かう。だけど……その間にも廊下ですれ違う人たちが、特に女性たちが、私をじっと見て、そして顔を背そむけていく。嫌な感じで胸が騒さわぐ中、ようやく総務のフロアに着いた――

毎朝、私が出勤する時間にフロアにいるメンバーは決まっている。

経理課長と主任、そして数人の男性社員だ。他の部に比べると、うちは圧倒的に女性の比率が高いんだけど、この時間にいる平の女性社員は私だけ。

お財布とポーチを机の引き出しにしまつて、まずは先に出勤していたみんなにお茶を出し、給湯室を掃除して冷蔵庫の整理をする。次に全ての会議室と応接室のテーブルを拭き、花瓶の花と水を替えた。それらを終えて自分の席に戻った時には、隣の席の由理さんが来ているのが毎朝の光景。

「おはようございます」

「おはよう、美奈ちゃん」

朝から見惚れるほど綺麗な笑みを浮かべる由理さんで目の保養をしながら、パソコンをたち上げる。すると……由理さんが顔をしかめ、これもまたいつものように言ってきた。

「また堀川、来てないのね。本当は朝の雑事は彼女の仕事なのに」

「でも別に誰がやっても同じですから」

「美奈ちゃんがそうやって甘やかすから、あの子が図に乗るのよっ」

我が総務部の新人には、毎朝他のみんなより少しだけ早めに来てやることがある。それがさつき私が終わらせてきた『朝の雑事』だ。

今年の総務の新人は堀川さんという女性だけど、彼女は毎日遅刻ギリギリにやってくるからこれができない。「もつと早く来なさい」と課長や主任がいくら注意しても聞か

ない彼女は、系列会社の常務の姪らしい。

それを初めて聞いた時は、なんだか遠い縁故だなあと思っただけで、仕事には関係ないと思っていたんだけど……うちの部長はそうは思わなかったらしい。言葉は悪いけど、何かにつけて彼女を鼻屑している。仕事でミスをした彼女を注意していた主任を怒鳴りつけた時、部内全員が白い目で部長を見たのは記憶に新しい。

とはいえ、春が来たらまた新人が来るだろうし、もともと早めに出社しないと落ち着かない性分の私にとって、朝の雑事は苦じゃない。私がやるせいで余計に彼女が反省しないんだと、由理さんにはよく叱られているけど……

(由理さんの言っていることはもつともだと思っただけど、誰もやらないっていうわけにもいかないし……)

いつものように由理さんとそんな話をしている間にも、ちらほらと女性社員たちが出社してくる。彼女たちはみんな私たちを見たあと、由理さんに挨拶をしていく。

「本木さん、おはようございまーす」

というように、必ず由理さんだけに。私が挨拶しても、こつちを見てもくれない。

(どうして? 先週までこんなことなかったのに……)

更衣室でのこともあって、また不安な気持ちの胸の中で渦を巻く。そんな私の横で、由理さんも彼女たちの態度に不思議そうな顔をしていた。

「なんなの？ あの子たち、なんか変じゃない？」
 「そうですね……私、何かしたんでしょうか……」

「そんなに気にすることないわよ、あの子たちって朝はいつもあんな感じだし。とはいえ、いい大人が会社であの態度はないわ」

（由理さんはそう言うけど、気にしないでいるなんて無理だよ……）

一週間が始まったばかりなのに、気が重くて仕方がなかった。

「立花部長とお付き合いますことになりましたっ」

由理さんと近くのお蕎麦屋さんでお昼をとっている時に、勇気を出して報告した。

当然驚かれるだろうし、私と部長では釣り合わない、なんてことを言われる覚悟もしていた。もしかしたら冗談だと思われるかもしれない。だって自分でもまだ信じられないんだから、他の人なら余計にそうだと思うんだ。

夢のような一夜のあと、正気に戻った私はテンパった。それはもうすぐく。

そんな私に立花部長は好きだと言ってくれた。そしてまたむにやむにやをしたあと、私を家につけてくれ、その時偶然会った母に真摯な態度で挨拶をしてくれたのだ。そんなこと初めてだったからなんだか恥ずかしかったけど、とても感動した。母も「いい人を見つけたな」と言ってくれた。

実は、昨日部長から電話が来た時に、会社では付き合っていることを秘密にしてほしいとお願ひしておいた。付き合っているのが私だなんて知られたら、立花部長のマイナスになってしまう気がしたから……。隠す必要はないって譲らなかつた立花部長も、私が必死にお願ひしたら最後にはしぶしぶ了承してくれた。

でも、いつもお世話になっていて、よく私に恋愛をしろと勧めてくれていた由理さんには、ちゃんと報告をしなくちゃと思つた。だから二人だけになれるお昼の時に言おうと、朝から決めていたのだ。

私の報告を聞いた由理さんは、一瞬動きを止めたあと……深いため息をついた。

「とうとう捕まっちゃったのね……。本当にいいの？ 美奈ちゃん。彼氏が欲しいなら私がつともつともーつといい男を紹介するわよ？」

「立花部長と私じゃ釣り合わないことはわかっているんです……でも私っ」

「違うわよ！ 立花に美奈ちゃんはもつたいたいと言っているの！ あんな性格悪い男に捕まっちゃうなんて！ てつきり立花がふられると思つていたのにっ！」

「由理さんは……その、信じてくれるんですか？」

「何が？ はあ……きつかけは何？ 金曜の飲み会？ さてはあの時、井上課長を味方にして私を出し抜きやがったわねっ、あいつっっ！」

「井上課長ですか？」

「そうよっ。井上課長つたら、私に美奈ちゃんはタクシーで先に帰ったとか言いやがったのよっ！　うちに泊まりに来る約束だったのにおかしいなって思ったのよっ！　まなまと騙されたよっ！　悔しいよっ！」

テーブルで見えないけど、由理さんが今、足をバタバタさせているのはなんとなくわかった。

由理さんは……私と立花部長が付き合っても、おかしくないって思ってくれてるのかな？

ホッとした途端に、嬉しさが込み上げてくる。

兄しかいない私にとつて、由理さんは姉みたいな人だから、立花部長と付き合うことを由理さんがどう思うか、正直すごく不安だったのだ。

しばらく唖っていた由理さんは、いきなりガバツと顔を上げると、険しい表情で私に聞いてきた。

「……美奈ちゃん、立花に流されたりしていない？　あんな男好きじゃないのに、うやむやのうちに何かされて、とかじゃない？」

「ええっ!？」

「まさかあの野郎……酔った美奈ちゃんを無理やり……」

「そっ、そんなことないですから！」

「だって美奈ちゃん、あいつに興味があるそぶりなんてなかったのに……」

「あの、その、実は前から憧れていたんです……」

「そうなの!？」

「は、はい」

目を丸くした由理さんに、俯きながら立花部長に惹かれたきっかけなんか話し始める。由理さんは時々唸りながらも最後まで聞いてくれた。そしてなんでかさつきよりも興奮した様子で私のほうに身を乗り出すと、私の右手を両手でギュッと握り締めてくる。「いい？　美奈ちゃん。立花と別れたくなったらすぐに私に相談するのよっ！　どんな手を使っても私が必ず、必ず別れさせてあげるからねっ！」

「ははは、すぐにふられちゃうかもしれないですけどね」

「すっごく残念だけど、それはないわ」

きっぱりと言いつつくれるのは由理さんの優しさだろう。

好きだと言ってくれた立花部長の言葉を疑うわけじゃない。私は自分のことが信じられないんだ。あんなに素敵な人を、私はいつまで繋ぎ止めておけるだろうって考えると、どうしたってマイナスなことしか想像できなくて……

とりあえず、失敗続きのダイエツトをまた頑張ろうと、お昼のかけ蕎麦を半分残すこ